ありがとう、秋葉

校　長　　武井　正明

「武井‼」
先日、ラウンド前の練習を終えて引き揚げようとした背中で、声がした。
「秋葉‼」…秋葉じゃないか。
彼とはもう二十年近く前になるだろうか、別のゴルフ場で偶然の再会を果たした。
その時、連絡先は交換したものの、やはり時間の差というのは簡単には埋まらない。そのまま、あっというまに今日まで来ていた。

だからこそ、知らん顔していれば、そのままやり過ごせるタイミングで、彼の方から声を掛けてくれたことが、本当に嬉しかった。
そして話せば、一瞬で高校時代に戻る。

秋葉潔。新潟明訓高の野球部でサードを守った。短く刈った頭と立ち姿がスラっとしていてカッコよかった。彼の機嫌の悪そうな顔を見たことがない。いつも笑顔。これぞまさに爽やかな高校球児。打撃よりも守備の構えの印象が強い。あの頃のユニホームは、明訓ブルーではなく左胸に縦書きで「明訓」だった。あのユニホームも、私は好きだった。

明訓には、お互いに第一志望を落ちた親友の淳も一緒に入った。野球部に私は入らなかった。しかし、淳はしっかり野球部に入って２年半やり切った。後に「あの時のおまえには、何を言っても無駄だった」と淳に言われた。
秋葉とは一度も同じクラスになったことはない。それがなぜ、お互いに憶えているのか。
これも情けない話だが、私が大会の度に、頻繁に球場に行って声を掛けていたからだ。（だったら、一緒にやればよかったのに…）甲子園とか、そういうことではなく、もはや秋葉は自分の夢であり、あこがれだった。だから、秋葉を見ているだけで、自分もやっているような気持ちになれた。

スタート前、秋葉の同伴者の方々に「秋葉君の高校時代、ものすごくカッコよかったんですよ」と話すと「その話、ホントだったんだ」と返ってきた。
父親と同じく明訓で野球をやった息子さん（悠君。後日検索すると、親父を遥かに凌ぐ明訓のスラッガー。県優秀選手賞受賞など、すごい球歴でした‼）も「お父さん、女子からも人気だったんだよ」と私が言うと「ホントですか？」と目を丸くして驚いた。
「俺なんかクズで話にならなかったけど、お父さんはすごかったんだよ」
「武井は途中で（野球）辞めちゃったからな」秋葉が微笑む。優しい笑顔も昔のまんまだ。

これはきっと神様の「ラウンドしなさい」というお告げに違いない。
年内に秋葉父子と一緒に廻ることになった。それが今から楽しみでならない。（敬称略）